

ポルカドット号探検記

水平に広がる風景

松本市美術館館長 小川 稔

降り注ぐ初夏の陽光、波間を渡る潮風や浮かぶ帆船の光景に五感が開放されるようだ。

フランス、ノルマンディーの港町に生まれ育った画家ウジェーヌ・ブーダンはこうした故郷の海の風景画を得意としたが、若いモネを海岸スケッチに誘い、光に浸された屋外の自然に開眼させ、印象派の誕生を促した存在としても知られる。

最近、ネット上で多く見かけるのは、スマホのカメラで撮影された縦型の写真や動画だ。同じ縦型の西洋宗教画には、天界に上昇する意思があったと思うが、ブーダン作品のほとんどが横型キャンヴァスに描かれている。

ロマン主義の文学や絵画作品で荒れ狂う海洋は、人と自然が対峙する主題として取り上げられた。だが、ブーダンの海は穏やかで水平線の位置は下がり、高く広がる空の描写に個性が発揮されている。空を見上げ、無限に変化する雲にみとれ、時間を忘れることがあるだろう。ブーダンは、刻々姿を変える空の様子をその場でスケッチ、キャンヴァス上



ウジェーヌ・ブーダン《ドーヴァル》1888年
油彩／カンヴァス ランス美術館(inv.907.19.32) C. LE GOFF©

では絵筆を素早く動かし、波、光、雲が流動する様子を微妙な色調で的確に捉えている。

ブーダン作品は、人間と海の関わりが時代とともに変化したことも考えさせる。神話や歴史物語の舞台となった海辺の風景画では、英雄たちや漁民らが登場人物であったのに、19世紀、ブーダンの時代の海浜は市民の日常の近くに在り、人々が余暇を過ごすのどかな場所となったことを教えてくれる。

「印象派の先駆者」、また「空の王者」という名のもとに海景や空を描く名手として知られるフランスの画家、ウジェーヌ・ブーダン。20歳の頃にフランス北部の港町ル・アーヴルで友人と画材店を開くと、顧客として店を訪れたジャン・フランソワ・ミレーらバルビゾン派の画家たちと交流する中で絵の道を志すようになります。パリでの3年間の修行ののち、故郷ノルマンディー地方を拠点とし、風景画や海景画を中心に制作しました。

戸外での制作を重視し、移ろいゆく光や大気の「瞬間」を捉える独自の風景表現は、多くの芸術家に影響を与えます。印象派の画家クロード・モネもそのひとりでした。ブーダンと同じく、ル・アーヴルに住んでいたモネ。カリカチュア（風刺画）を描き小遣い稼ぎをしていた青年の才能に気づいたブーダンは、アトリエを出て、空の下、空気を肌で直接感じながら描くことの大切さを教えます。のちにモネは当時を振り返り「ブーダンは限らない優しさで私を導いた。そして私の眼は開かれ、自然の真の姿を理解したのだ。」と語っています。

日本では約30年ぶりの回顧展となる本展では、約100点の作品を通してブーダンの初期から晩年までの画業全体を8つの切り口でご紹介します。海景、空といったブーダンならではの作品に加え、自然が垣間見せる一瞬一瞬を切り取ったかのような臨場感あふれる素描や習作もみどころのひとつです。「風景画の時代」と呼ばれる19世紀に大きな一石を投じたブーダンの魅力をたっぷりとお楽しみください。



Relay Essay

印象派の画家たち

当館学芸員 務臺 歩

「印象派の画家」と聞くとルノワールとモネがすぐに頭に浮かぶ。それは、はじめに観た展覧会がブリヂストン美術館（現・アーティゾン美術館）の「ルノワール展」であり、次いで観たのが「モネと印象派の画家たち」という当館に巡回してきた展覧会だったからだろう。

当時は7、8歳頃、どこで観たかは全く覚えていなかったが、気に入っていつかお土産に買ってもらった絵葉書たちは今も大切に綴っている。

ルノワールの絵葉書は、『ヴェネツィアの大運河（カナル・グランデ）』。空気に溶けるような空の色合いが、青の濃淡だけでなく淡い黄色やピンク色も交えて表現されており、松本から西の方を見た空の色と重なったのを覚えている。

モネの絵葉書は、一枚目が『セーヌ河畔の朝』。河の畔の木々の陰影が単純な黒ではなく、緑の濃淡と橙から茶色、代赭色などで表現されている。朝の光景だが、その絵を目にしたとき浮かんできたのが、実家の近くの大きくて深い池。夕日がちやうど池の向こうの山に沈んでいく時、山の端や木々から洩れる太陽の光と影が、藍色や橙を帯びた深緑で、葉の影の色を絵の具のピリジアングリーンだと感じた。二枚目の『ジヴェルニーの黄色いアイリス畑』には、紫や黄色の花畑の向こうに林と空が広がり、花や木々、空の間を吹き抜けていく「風」が筆の運び方によって表現されている。当時、目に見えない風、手に取れない空や光の色彩をとらえ再現した画家の目と筆致に深い感動を覚えた。

ウジェーヌ・ブーダンは「印象派の先駆者」と呼ばれ、日本での展覧会開催は30年ぶり、これから出会える作品たちにワクワクしている。

ART EXHIBITION GUIDE

当館学芸員 中澤 聡



1.《トルーヴィル街道、ル・ビュタン近郊》1860-63年 油彩／カンヴァス ウジェーヌ・ブーダン美術館、オンフルール Honfleur, musée Eugène-Boudin / Illustria 2.《ベルク、出航》1890年 油彩／カンヴァス ランス美術館(inv. 907.19.34) C. DEVLEESCHAUWER© 3.《ル・クロワジック》1897年 油彩／カンヴァス アンドレ・マルロー近代美術館、ル・アーヴル © MuMa Le Havre / Florian Kleinfenn 4.《突風》1848年 鉛筆、茶色の淡彩／紙 個人蔵、ノルマンディー Photo Studio Astral/Studio Moyne

ウジェーヌ・ブーダン展

瞬間の美学、光の探求
Eugène Boudin maître de l'instantanéité

会 期／2026年7月7日(火)～8月30日(日)
休 館 日／月曜日(7月20日と8月10日は開館)、7月21日(火)
開館時間／9:00～17:00(入場は16:30まで)

観 覧 料／一般1,600円、大学生・70歳以上の松本市民1,100円

※電子チケット購入の場合は各100円引き
※高校生以下無料、障がい者手帳携帯者とその介助者1名無料
※20名以上の団体は窓口料金から各200円引き(当日窓口販売のみ)
※大学生・70歳以上の松本市民は、観覧当日、証明書(免許証、学生証等)の提示が必要



Workshop report

「つぐ minä perhonen」展 関連プログラム

「つぐ minä perhonen」展の松本での開催を記念して、
会期中、様々な関連イベントを行いました。



皆川 明・田中景子による ギャラリートーク(4/16)

開幕日の閉館後、抽選で当選された約70名が参加されました。ミナ ペルホネン創設者・デザイナーの皆川 明さん、代表・デザイナーの田中景子さんから、展示室を巡りながらデザインの制作過程や織、刺繍、プリント工場との協業など、さまざまな解説をいただきました。参加者からたくさんの質問が出るなど充実した内容となりました。



ワークショップ 「テキスタイルのデザインを しよう」(4/25)

ミナ ペルホネンのデザインを担当されているスタッフの方々に講師として招き、テキスタイルのデザイン工程を体験しました。思い思いにちぎったり、切ったりした色紙を台紙に貼りつけ、それを繰り返すことで自分だけのテキスタイルデザインが完成しました。



皆川 明・田中景子トークイベント(5/9)

小川館長がファシリテーターとなり、皆川 明さん、田中景子さんに、「つぐ」展やミナ ペルホネンの活動、松本との所縁などについてお話をお聞きしました。約150人の参加者の方々が貴重なお話に耳を傾けていました。



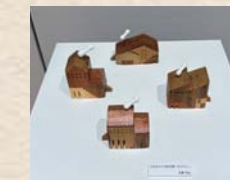
撮影：平林岳志

アオイヤマダ パフォーマンス (5/17)

企画展示室内でミナ ペルホネンの洋服を身にまとったアオイヤマダさんによるパフォーマンスを行いました。“tambourine”

をはじめ、さまざまなテキスタイルを音楽に織り交ぜながら紹介。長野県歌「信濃の国」も交えた松本ならではのパフォーマンスで、来館された方々を魅了しました。

信州の「木の匠たち」展 20周年記念展 (4/29～5/6)



2006年に信州の木工家を紹介した西川栄明著『木の匠たち』の発刊を機に、有志により始まった展覧会。作品は、家具、食器、オブジェ、遊具、レリーフなど多岐にわたり、高い木工技術に裏づけされたオリジナリティあふれる作品の数々は、多くの来場者を惹きつけていました。



建築家とめぐる城下町 みずのタイムトラベル〈松本城編〉 (5/16・17・23・24)

建築家や学生たちが案内役となり、建物や湧水に着目しながら城下町松本を巡る人気のツアー。今回は松本城の本丸へ行きました。天守や城郭に刻まれた歴史の痕跡を、建築の専門的な視点で解説いただきながら見学しました。知られざる松本城の構造に、参加者は興味津々。充実したタイムトラベルとなりました。

「工芸の五月」 関連プログラム

松本の様々な会場で工芸にまつわる展示やワークショップなどが開催される「工芸の五月」。今年の「工芸の五月 美術館ステージ」は、信州の「木の匠たち」展と建築家とめぐる城下町みずのタイムトラベル〈松本城編〉を開催しました。



《蓼科高原》 たてしな

当館学芸員 藤原裕希

田村一男は1904年12月4日、現在の東京都中野区に生まれた。あまり裕福とは言えない暮らしであったため、高等小学校を卒業後はすぐに働き始め、その日々の中で画家への憧れを抱くようになる。人生の転機となったのは、20歳の夏、田村と同じ絵画研究所に通う茅野市出身の彫刻家・矢崎虎夫(1904-1988)に誘われて訪れた蓼科高原。幼少から一度も東京を離れたことなかった田村は、蓼科高原の果てしなく広がる雄大な風景に心を奪われ、以降、日本の山と高原を主題に、92歳で亡くなるまで自然の中に身を置きながら描き続けた。

本作は、そんな田村が生涯愛し続けた蓼科高原を描いたうちの1点。人気のない静かな冬景色を好み、晩秋から冬にかけての山や高原を単色に近い色彩で表現した作品が多い田村だが、本作は打って変わって画面全体が色鮮やかな緑に染まっている。空をも覆いつくすような青々とした高原の中、丘の上へと一本の道が伸び、その先は緑の中に溶け込んで見えない。どこまでも続く道は、田村が歩み、挑戦し続けた画業の道を暗示しているかのようだ。田村が若き日に見た蓼科高原の風景も、このような緑一面の世界だったのだろうか。静寂に包まれた冬の光景を愛する一方で、その心の中にはいつも、20歳の夏に出会った蓼科高原の緑豊かな風景が広がっていたのかもしれない。

作者…田村一男(1904-1997)
作品名…蓼科高原
制作年…1995年
技法・材質…油彩・キャンバス
サイズ…89.4×145.5cm

※本作品は2026年8月23日(日)まで、「第1期コレクション展示」にてご覧いただけます。



ミュージアムショップ便り

当館ミュージアムショップ 店長 鬼頭 千佳



©YAYOI KUSAMA

松本来訪の目的は雄大なアルプスの山々や松本城、民藝や工芸が盛んなことであったりと思いますが、その中でも松本市出身の芸術家・草間彌生の作品を鑑賞することが目的の方々も少なくありません。いまや国内外の美術館で草間彌生作品を目にすることができそうですが、殊に少女時代を過ごした「松本」での鑑賞体験を掌中の珠にしてみたい。その願いを込めて、《葡萄》をモチーフにトートバッグとスケッチブック、《花さける信濃路》をモチーフにポーチ、マグネット、風呂敷を美術館のオリジナル商品として制作しました。

松本平には、江戸時代から続く葡萄農園が広がり、また春には桜に続き、林檎の花も可愛らしく咲く様子を目にすることができます。その眺望を包み込む信州・松本の空気と、《葡萄》や《花さける信濃路》といった作品が溶け合い、「ふるさと」に思いを馳せる普遍的な心情へと私たちを誘います。

- トートバッグ 葡萄 ¥4,200 ●スケッチブック 葡萄 ¥2,310 ●ポーチ 花さける信濃路 ¥2,750
- マグネット 花さける信濃路 ¥2,200 ●風呂敷 花さける信濃路 ¥22,000